

2007.2.24【本当に生命保険は必要なのか？】コラム = 松浦則雄

《生命保険は小難しい理屈などあまり考えないほうが良い》

保険の多寡は、世代、年代、生活水準により「人それぞれ千差万別」です。万が一「病気や死亡」しても安心「悠々自適」するために保険に加入するのが保険の「本来目的」です。



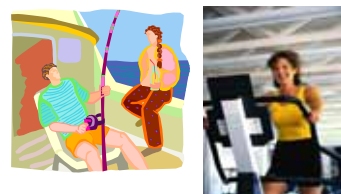
「ないよりあったほうがよい」程度の保険は「安い掛け金で済みます」。しかし「経済的損失」を充分カバーするのが「保険の使命」である考え方からすると「安い掛け金」の保険は「補償も安い」。結果的に本来の保険の使命からはかけ離れており「不十分です」。



自分の「生存リスク」と「死亡リスク」を自覚した人のみが、「生命保険」の必然性を体感する事はいまさら言うまでもありません。

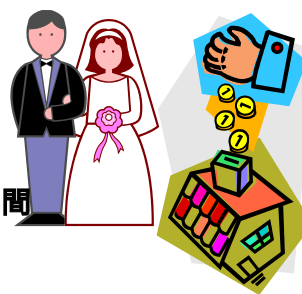
なんといわれようが保険の必然性は分かっているが、保険に入りたくない人はこれからも生命保険業界の人には「耳を貸さない」ほうが良いようです。

60歳までの死亡リスクは、統計データによると1%前後といわれます。すなわち100人に一人ぐらいしか死にません。99人は元気そのものです。でもその100人に一人の中に、自分も入るかもしれないので、「死亡保険」に加入する人がいるわけです。



かといって「1億円」の高額の保険に加入しておけば、残された家族の喜びと幸せはサプライズレベルに「喜びもひとしお」の極めです。しかし「1億円」をもらうために20歳代から60歳までおおよそ40年間も保険料を納め続けたら、数千万円の莫大な掛け金になります。しかも100人に一人の中に入るかもしれない「一縷の望み」的可能性のための投資です。

必要額が「1億円」か「5千万円」か「1千万円」かは、人それぞれ「千差万別」です。無駄な「お金」の使い道にならないために、自分の人生設計が「いかに？」が問題になります。 **新入社員 結婚 子供ができる 子供の教育期間**



マイホーム取得 子供の結婚など、高齢化に伴う人生の「イベント」が盛りだくさんです。

この「イベント」のときに「思わぬ出費」が、普段の生活費以上に「突出」して負担になるから、大黒柱の「稼ぎ親方」が死亡したときには「負の遺産」として、残された家族に引き継がれます。

から までの「イベント」のときに、最大限いくらなのかを試算するのが、「いくらの生命保険」の目安なのです。「必要な金額」を「必要な時期」にあわせて加入しておけば、無駄な保険料を納めなくてすむ事になります。「保険の必然性」を考えたそのときから、一度で良いからこの「必要な金額」を計算する機会を是非持ってください。